埋蔵文化財調査報告書97

大 門 遺 跡

2023

名古屋市教育委員会

例　言

1　本書は、名古屋市南区笠寺町字大門ほかに所在する大門遺跡の第１次発掘調査報告書である。

2　調査地点は、名古屋市南区笠寺町字大門 46 番、71 番２の土地に計画された個人住宅建築予定地である。

3　発掘調査期間、面積等は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和４年７月 11 日から令和４年８月４日
発掘調査面積	60 ㎡
発掘調査の原因	個人住宅建設に伴う本発掘調査
調査主体	名古屋市教育委員会
調査担当	発掘調査に至る調整事務は、教育委員会文化財保護室学芸員 林　順が、 発掘調査は、同学芸員竹内宇哲、水野裕之が担当した。

4　本書の編集、執筆は、水野が担当した。

凡　例

目　次

1　遺跡の位置と環境……1
2　経過……2
3　調査の方法と成果
(1)　調査の方法……3
(2)　層序……3
(3)　調査の成果
1）遺構・遺物の概要 ……4
2）遺構と遺物 ……4
4　まとめ ……18
報告書抄録

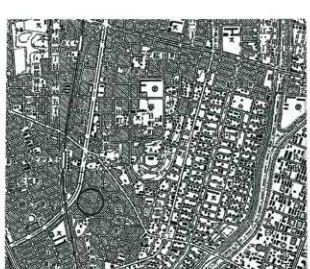


図１　遺跡位置図（2万5千分の１）

1　遺跡の位置と環境

大門遺跡は、瑞穂区から南区にかけての山崎川と天白川に開析されて挟まれた標高 12 mほどの熱田台地上の東西 90 m、南北 160 mほどに及ぶ推定範囲の遺跡で、弥生時代と中世の散布地として知られている。発掘調査は今回が初めてである。

当遺跡付近の台地上には、南側 50 mに寺部城跡（戦国時代）、北側 50 mに、笠寺観音遺跡（弥生・古墳時代、中・近世）、西側 250 mに松城町遺跡（平安時代）、東側 300 mには見晴台遺跡（弥生時代後期の環濠集落のほぼ全域が残存する。縄文時代～中世。）がある。大門遺跡を含む見晴台遺跡周辺には 20 か所以上の遺跡が知られている。

また、尾張四観音のひとつとして知られる天林山笠覆寺（通称笠寺観音）は、遺跡の北方約 150 mに位置している。笠覆寺山門の前は、江戸時代に整備された東海道が通っていて、付近には、街道の面影が残っている。その山門から南へ延びる門前道が遺跡東側を南北に通っている。

笠覆寺は、笠寺縁起などによれば天平年間（729～749 年）に呼続の浜に漂着した霊木をもって、禅光上人が十一面観音像を彫り、南区粕畠町あたりに建てた小堂（小松寺）に安置したという。8 世紀中頃には、人々の信仰と生活の場がこの付近にあったものとおもわれる。その後荒廃したが、延長年間（923～931 年）に太政大臣藤原基経の子、兼平が現在の地に寺を再興し、笠覆寺と改めたという。しかし、再び寺が荒廃したのを嘉禎 4（1238）年に僧阿願によって再々興された。現在、笠覆寺所有の本尊十一面観音像は平安時代の作とされ、昭和 33 年に愛知県の指定文化財となっている。

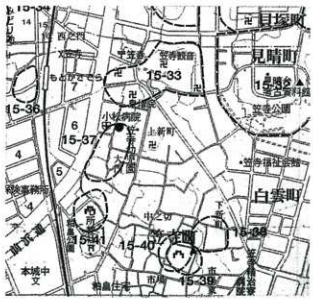


図2　調査位置（●印）と周辺の遺跡

15-32見晴台遺跡	15-33笠寺観音遺跡
15-36松城町遺跡	15-37大門遺跡
15-38下新町遺跡	15-39市場遺跡
15-40市場城跡	15-41寺部城跡

写真1　調査地点 簡手前（西から）

写真2　笠覆寺（笠寺観音）の山門

2　経過

当該土地に個人住宅建築計画があり、令和4年5月26日に名古屋市教育委員会文化財保護室は、試掘調査を実施した。

その結果、遺物包含層や地盤層である熱田層面で竪穴住居跡らしい遺構が残存していることが判った。このため、住宅建設に伴う事前の発掘調査を行うことで、土地所有者、施主などとの協議を行い、理解と協力を得ることができ、令和4年7月12日から8月4日にかけて、発掘調査を実施した。

なお、当遺跡での発掘調査は、試掘調査も含めて今回が初めてである。これまでは、名古屋市の分布調査等により、弥生時代・中世の遺跡として、周知の埋蔵文化財包蔵地となっていたが、先に行われた試掘調査では、奈良時代の須恵器片が包含層などから多く検出された。

発掘調査作業は、7月12日からの準備工のあと、7月14日まで、表土層と撹乱部分の掘削を行なった。出土遺物量は多くなく、コンテナケース2箱分程度であった。8月4日をもって現場作業を終了した。

写真3　調査状況

写真4　調査状況

写真5　調査区東半部分の遺構検出状況

写真6　調査状況（西から）

3　調査の方法と成果

(1)　調査の方法

調査は、小型のバックホウにより表土層および撹乱部分を除去した。発生土は、場内に積み置きが可能であったため、調査対象地を分割せずに調査ができた。

遺構の検出作業は、暗褐色土層（主に図4の16層、18層）とした遺物包含層中では識別が困難であったため、当遺跡の地盤層（地山）である熱田層（台地を形成する更新生層）の黄橙色土層上面で行った。

調査が進むなかで、遺物包含層として捉えていた多くの部分は、主に重複した竪穴住居跡の埋土の部分であるとおもわれた。このため、記録されるほとんどの遺構の深さについては、検出時の地山面からのものであり、本来の数値は不明である。

(2)　層序

調査地点に堆積している基本的な土層は、調査区南壁（土層図C-D間）の中央部付近が基本土層とおもわれる。上から表土（撹乱土層）が約60㎝、灰褐色土層（中世の堆積層とおもわれる）が約20㎝、暗褐色土層（古代の堆積層とおもわれる）が約30㎝で、以下地山の熱田層（黄褐色～黄橙色土）である。

ただし、先にも触れたように、当調査区の遺構群の埋土が主に暗褐色土層中で重複しているとおもわれることから、純粋な遺物包含層との識別が困難であった。

写真7　調査状況（西から）

写真8　調査区東壁土層断面

写真9　調査区北壁土層断面

写真10　調査区南壁土層断面

(3) 調査の成果

1) 遺構・遺物の概要

主な検出遺構は、竪穴住居跡がSB01～07までの7軒であるが、すべて部分的な検出であった。SB03は不明確であり、また、SB02とSB04としたものは、同一住居跡の可能性があることから、検出住居跡は、6軒程度があったものとおもわれる。土坑（SK）は、3基検出したが、検出面からの埋土の堆積は薄く、かろうじて範囲を検出できるものであった。溝状遺構（SD）は、南北方向に延びる1条を検出した。また、掘立柱建物跡と考えられる柱穴が10数基検出された。ピット（柱穴、柵など）として検出したものは、P1～53である。他には、第2次大戦時の防空壕と考えられる遺構があった。

写真11　調査区東半部主要遺構（南から）

写真12　調査区中央部主要遺構（南から）

2) 遺構と遺物

● SB01

調査区中央部北側で、隅丸方形の竪穴住居跡の北西隅部分を検出した。西壁に沿って幅数十センチ、深さ約4㎝の浅い溝が作られている（幅広の壁溝）。出土遺物には、古代の土師器甕胴部片、須恵器有台坏と蓋、無台坏片などがある。SB01と他の遺構の関係は、調査区北壁の土層断面により、SB05に切られ、SB02・04を切っていることが判る。

写真13　SB01検出状況

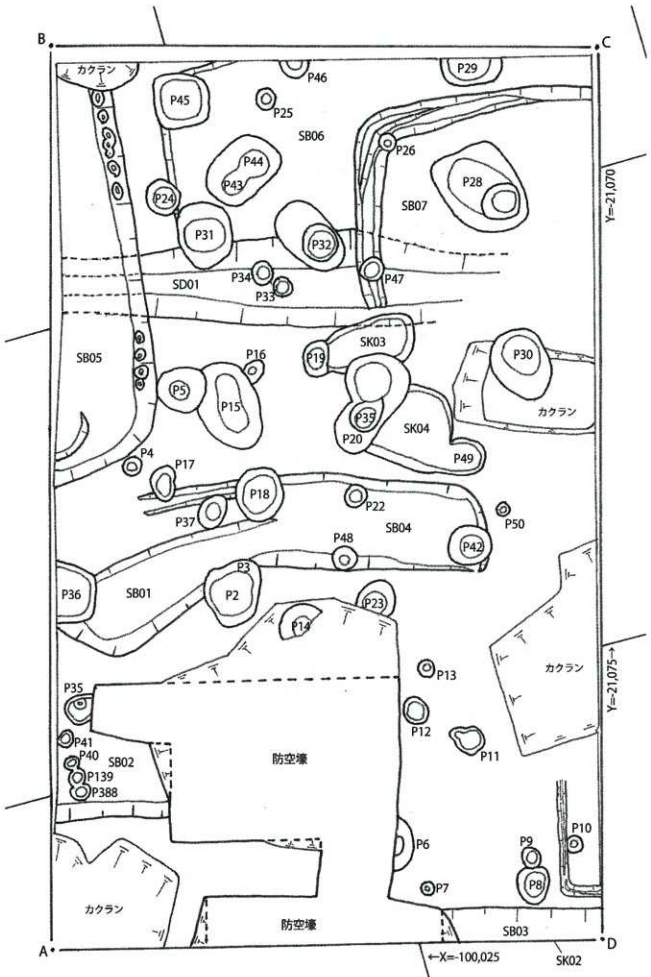
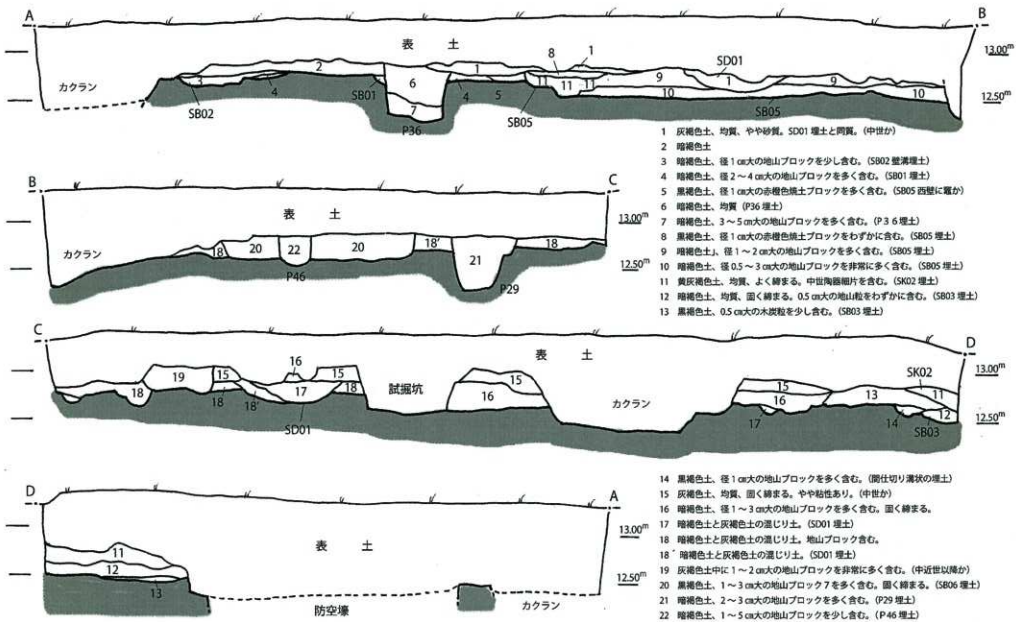


図3　調査区遺構平面図（S=1/40）



1　灰褐色土、均質、やや砂質。SD01 埋土と同質。(中世か)
2　暗褐色土
3　暗褐色土、径 1 cm大の地山ブロックを少し含む。(SB02 壁溝埋土)
4　暗褐色土、径 2～4 cm大の地山ブロックを多く含む。(SB01 埋土)
5　黒褐色土、径 1 cm大の赤橙色焼土ブロックを多く含む。(SB05 西壁に篤か)
6　暗褐色土、均質 (P36 埋土)
7　暗褐色土、3～5 cm大の地山ブロックを多く含む。(P36 埋土)
8　黒褐色土、径 1 cm大の赤橙色焼土ブロックをわずかに含む。(SB05 埋土)
9　暗褐色土、径 1～2 cm大の地山ブロックを多く含む。(SB05 埋土)
10　暗褐色土、径 0.5～3 cm大の地山ブロックを非常に多く含む。(SB05 埋土)
11　黄灰褐色土、均質、よく締まる。中世陶器細片を含む。(SK02 埋土)
12　暗褐色土、均質、固く締まる。0.5 cm大の地山粒をわずかに含む。(SB03 埋土)
13　黒褐色土、0.5 cm大の木炭粒を少し含む。(SB03 埋土)
14　黒褐色土、径 1 cm大の地山ブロックを多く含む。(開仕切り溝状の埋土)
15　灰褐色土、均質、固く締まる。やや粘性あり。(中世か)
16　暗褐色土、径 1～3 cm大の地山ブロックを多く含む。固く締まる。
17　暗褐色土と灰褐色土の混じり土。(SD01 埋土)
18　暗褐色土と灰褐色土の混じり土。地山ブロック含む。
18´　暗褐色土と灰褐色土の混じり土。(SD01 埋土)
19　灰褐色土中に 1～2 cm大の地山ブロックを非常に多く含む。(中近世以降か)
20　黒褐色土、1～3 cm大の地山ブロック 7 を多く含む。固く締まる。(SB06 埋土)
21　暗褐色土、2～3 cm大の地山ブロックを多く含む。(P29 埋土)
22　暗褐色土、1～5 cm大の地山ブロックを少し含む。(P46 埋土)

図4　調査区土層断面図 (S=1/40)

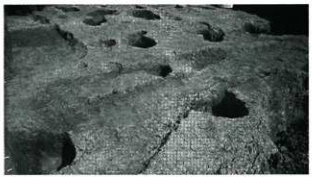


写真14　SB01

写真15　SB01出土遺物

● SB02・SB04

調査区西半部分で検出されたSB02とSB04を同一の竪穴住居跡とした。遺構の東辺と南東部隅部には、幅約1mの壁溝があり、検出面からの深さは10cm以内である。復元される遺構の規模は、南辺が3.5m、南北長は5m以上である。調査区壁面の土層断面では、SB01がSB02を切っている。

出土遺物には、須恵器有台坏とその蓋、無台坏、大甕頸部片、砥石片がある。遺構に伴う柱穴は、特定が困難である。なお、P（ピット）18内には焼土と土師器甕片が堆積しており、竈が付近に存在していたかもしれない。

写真16　SB02・SB04

● SB03

調査区の南西部分で検出された竪穴住居跡の一辺かとおもわれる。また、この部分が壁際の幅広の壁溝内側の一辺とすると、すぐ東側にあるL字状の細い溝は、竪穴住居の床に作られた間仕切り状の遺構とも考えられる。土師器長胴甕の胴部小片がわずかに出土した。

写真17　SB02・SB04出土遺物

写真18　SB03

写真19　SB03出土遺物

● SB05

調査区の北壁東半部付近で検出された比較的状態の良い遺構である。隅丸方形の竪穴住居跡の南西隅部と南辺の一部である。壁際には、幅15～20㎝の壁溝があり、その底面には小穴の列が部分的に残っていた。壁の構造に関係するものであろう。埋土の厚さは20～30㎝弱あり、今回検出の竪穴住居跡のなかでは、最も良好に残った遺構である。床面部分は、地山を削平したうえで地山ブロックを多く含む貼土が施されている状況であった。検出した床の範囲では、柱穴は無かった。

出土遺物はわずかで、須恵器無台坏、有台坏の蓋の小片のみであった。遺構の重複関係では、SB01より新しい。

写真20　SB05（SD01との重複）

写真21　SB05（西から）

写真22　SB05（西から）

写真23　SB05出土遺物

● SB06

当遺構は、調査区東端部で検出された竪穴住居跡の北東部分とおもわれるが、隅部は、掘立柱建物跡と考えられる柱穴（P45）と重複しており、形状は明確でない。検出面から床面までの深さは、5㎝程度である。出土遺物は須恵器有台坏の蓋片がある。遺構の、重複関係では、SB07に切られている。

写真24　SB06

写真25　SB06出土遺物

● SB07

調査区南東部で竪穴住居跡の北東部分を検出した。検出状況からSB06の後につくられた遺構である。壁際には、幅20～25㎝の壁溝が、5～8㎝の深さで残るが、隅部以外の部分の残存状態は良くない。また床面にあたる部分でも、火処の痕跡はなく、住居に伴う柱穴も不明である。

出土遺物は、須恵器有台坏の蓋小片が出土したのみである。本住居の埋土は、調査区南壁土層図（C-D）の18層とおもわれる。

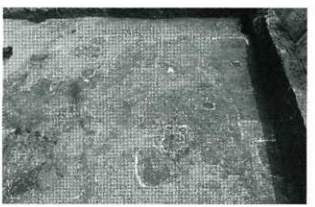


写真26　SB06、SB07検出状況（南から）

写真27　SB07

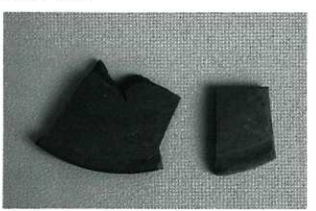


写真28　SB07出土遺物

● SD01

〈形状〉溝状、直線状

〈長さ〉6 m以上

〈 幅 〉110 cm（推定）

〈深さ〉約 20 cm

〈埋土〉灰褐色土

〈遺物の種類と時期〉灰釉広口瓶片など、中世以前

〈遺構の性格〉南から北へ下がる溝

写真29　SD01

● SK02（SK01 は欠番）

〈形状〉調査区壁の北東部で断面のみ確認

〈長さ〉1.4 m以上

〈 幅 〉不明

〈深さ〉約 20 cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉中世陶器細片

〈遺構の性格〉不明

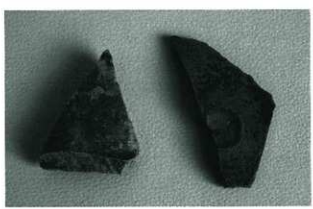


写真30　SD01出土遺物

● SK03、SK04

〈形状〉不整方形

〈長さ〉約 1 m

〈 幅 〉SK03（約 50 cm）、SK04（約 80 cm）

〈深さ〉約 6 cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉

SK03（須恵器高盤片）、SK04（須恵器坏片）

写真31　SK02

写真32　SK03（左）、SK04（右）

写真33　SK03（左）・SK04（右）出土遺物

● P2・P3

〈形状〉不整方形

〈寸法〉長さ約 70 ㎝、幅約 60 ㎝、深さ約 40 ㎝

〈埋土〉灰褐色土

〈遺物の種類と時期〉山茶碗小皿、須恵器蓋片など

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡か

● P5

〈形状〉不整円形

〈寸法〉長さ 55 ㎝、幅 50 ㎝、深さ約 30 ㎝

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器蓋片など

〈遺構の性格〉柱穴か

● P15

〈形状〉楕円形

〈寸法〉長さ 1.0 m、幅 65 ㎝、深さ約 70 ㎝

〈埋土〉暗褐色土、均質

〈遺物の種類と時期〉須恵器有台坏片（8 世紀頃）

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡か

● P16

〈形状〉楕円形

〈寸法〉長さ 30 ㎝、幅 15 ㎝、深さ約 20 ㎝

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器坏片

〈遺構の性格〉不明

● P18

〈形状〉楕円形

〈寸法〉長さ約 60㎝、幅約 55㎝、深さ 18㎝

〈埋土〉暗褐色土中に焼土塊混じる。

〈遺物の種類と時期〉須恵器有台蓋片、土師器甕片（8 世紀頃）

〈遺構の性格〉火処付近に位置するピットか

写真34　P2・P3出土遺物

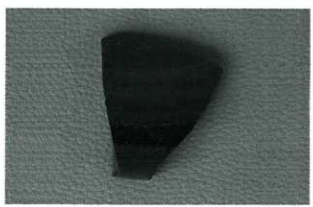


写真35　P5出土遺物

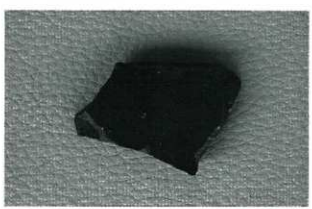


写真36　P15出土遺物

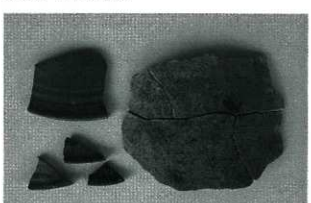


写真37　P18出土遺物

● P26

〈形状〉円形

〈寸法〉径 25 cm　深さ 6 cm

〈埋土〉灰褐色土

〈遺物の種類と時期〉山茶碗片（14 世紀頃）

〈遺構の性格〉中世の柱跡又は杭跡か

写真38　P26出土遺物

● P31

〈形状〉楕円形

〈寸法〉長さ 75 cm、幅 60 cm、深さ約 70 cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器無台坏（8 世紀頃）

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡

写真39　P31出土遺物

● P32

〈形状〉楕円形

〈寸法〉長さ 90 cm、幅 55 cm、深さ約 60 cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器無台坏（8 世紀頃）

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡

写真40　P32出土遺物

● P36

〈形状〉方形状

〈寸法〉長さ 60 cm、幅 40 cm以上、深さ約 60 cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉灰釉陶器皿（10 世紀頃）

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡

写真41　P36

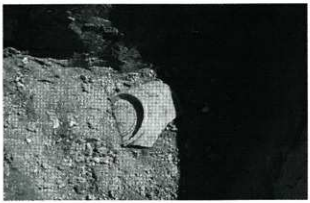


写真42　P36灰釉陶器皿出土状況

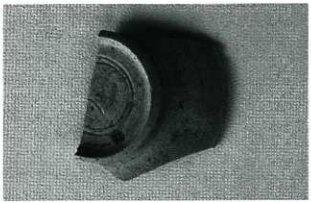


写真43　P36出土遺物

● P44（P43 を含む）

〈形状〉楕円形

〈寸法〉長さ約 80 ㎝、幅 60 ㎝、深さ約 65 ㎝

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器甕片、須恵器蓋片
（8 世紀頃）

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡か

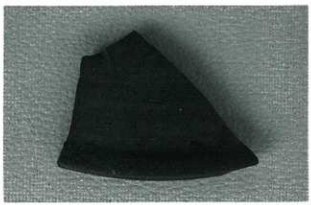


写真44　P44出土遺物

● P45

〈形状〉不整円形

〈寸法〉径約 60 ㎝

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器甕片、高盤片
（8 世紀頃）

〈遺構の性格〉掘立柱建物跡

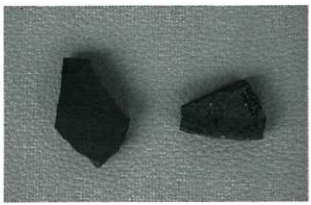


写真45　P45出土遺物

●その他（防空壕）

調査区西端部近くで検出された長方形を連結した形状の防空壕とおもわれる遺構（土坑）である。地山面で、長辺約 2.5 m、短辺約 1.75 m、深さ約 1.25m で、短辺の一方に出入口とおもわれる 80 × 50 ㎝程度の方形の突出部が付く。また、西側の土坑の長辺の一部に別の防空壕との連結通路が幅約 80 ㎝で作られている。埋土中からは瓦片が少量出土したのみである。

写真46　防空壕

写真47　SB05、SB06、SD01の検出状況

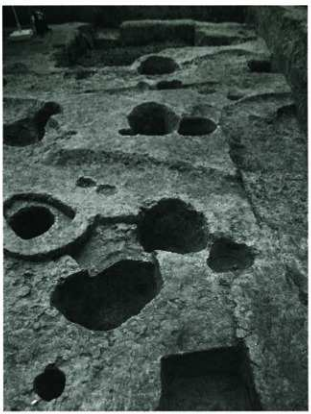


写真48　掘立柱建物跡の柱穴列
（手前からP45、P43・44、P31、P15、P2・3）

写真49　調査区全景（地山面での遺構検出状況）南から

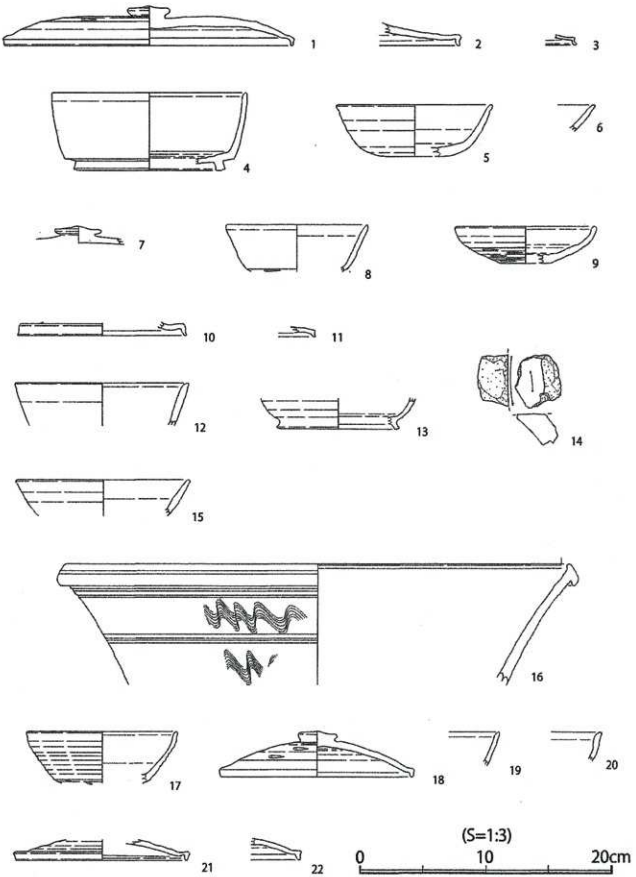


図5　出土遺物実測図（1）（S=1/3）

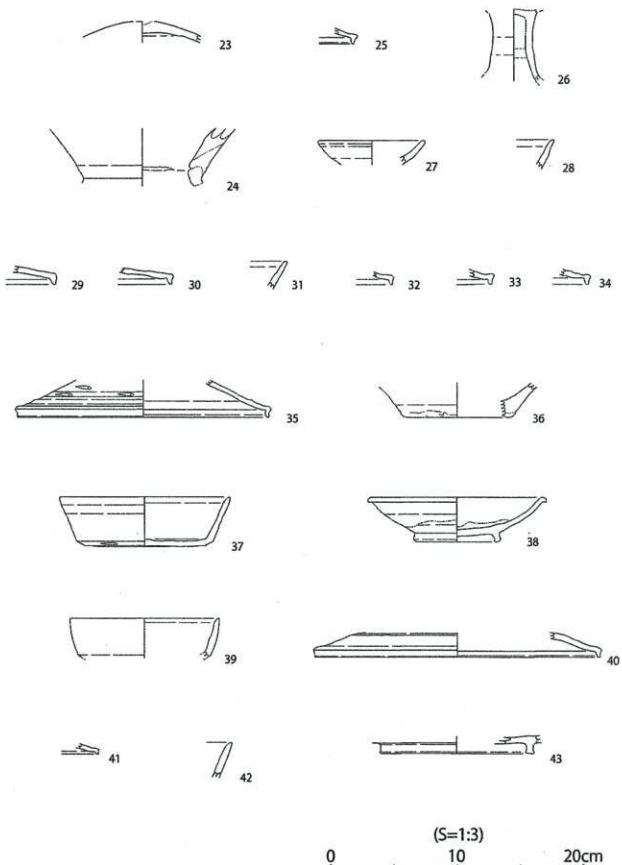


図6　出土遺物実測図（2）(S=1/3)

表 1　掲載遺物表

番号	種類	器種	出土位置	時期	特徴など
1	須恵器	有台坏蓋	SB01	8 世紀頃	
2	須恵器	有台坏蓋	SB01	8 世紀頃	
3	須恵器	有台坏蓋	SB01	8 世紀頃	
4	須恵器	有台坏	SB01	8 世紀頃	
5	須恵器	無台坏	SB01	8 世紀頃	
6	須恵器	無台坏	SB01	8 世紀頃	
7	須恵器	有台坏の蓋	SB02	8 世紀頃	
8	須恵器	無台坏	SB02	8 世紀頃	
9	須恵器	？	SB04	？	
10	須恵器	有台坏の蓋	SB04	8 世紀頃	
11	須恵器	有台坏の蓋	SB04	8 世紀頃	
12	須恵器	無台坏	SB04	8 世紀頃	
13	須恵器	有台坏	SB04	8 世紀頃	
14	石製品	砥石	SB04	8 世紀頃	
15	須恵器	無台坏	SB04	8 世紀頃	
16	須恵器	甕	SB04	7 世紀	
17	須恵器	有台坏	SB05	8 世紀頃	
18	須恵器	有台坏の蓋	SB05	8 世紀頃	
19	須恵器	有台坏	SB05	8 世紀頃	
20	須恵器	有台坏	SB05	8 世紀頃	
21	須恵器	有台坏の蓋	SB07	8 世紀頃	
22	須恵器	有台坏の蓋	SB07	8 世紀頃	
23	灰釉陶器	？	SD01	10 世紀頃？	
24	灰釉陶器	広口瓶	SD01	10 世紀頃	
25	須恵器	有台坏の蓋	SK02	8 世紀頃	
26	須恵器	高盤	SK03	8 世紀頃	
27	山茶碗	小皿	P2	13 世紀後半	
28	須恵器	有台坏	P2	8 世紀頃	
29	須恵器	有台坏の蓋	P3	8 世紀頃	
30	須恵器	有台坏の蓋	P5	8 世紀頃	
31	須恵器	坏	P15	8 世紀頃	
32	須恵器	有台坏の蓋	P18	8 世紀頃	
33	須恵器	有台坏の蓋	P18	8 世紀頃	
34	須恵器	有台坏の蓋	P18	8 世紀頃	
35	須恵器	有台坏の蓋	P18	8 世紀頃	
36	山茶碗	碗	P26	13 世紀後半	
37	須恵器	無台坏	P31	8 世紀頃	
38	灰釉陶器	碗	P36	10 世紀	
39	須恵器	無台坏	P44	8 世紀頃	
40	須恵器	有台坏の蓋	P44	8 世紀頃	
41	須恵器	有台坏の蓋	P45	8 世紀頃	
42	須恵器	坏	P45	8 世紀頃	
43	須恵器	有台坏	P49	8 世紀頃	

4　まとめ

大門遺跡の当地点の発掘調査から、奈良時代の竪穴住居跡が６軒、溝状遺構１条、土坑３基、柱穴などのピットが５３基検出された。遺構は、調査区内全面に広がりを見せ、四方それぞれにさらに続くものとおもわれる。当遺跡は、埋蔵文化財包蔵地の認定段階では、弥生土器と山茶碗（中世）の出土遺物が知られたことから、遺跡の時代も弥生時代・中世とされていたのであるが、今回の初めての発掘調査地点からは、弥生時代に属する遺構、遺物は無く、中世の遺構、遺物もわずかであった。このことは、周辺の遺跡群が、弥生土器（主に後期）や中世の遺物が出土する遺跡が多いことからみると意外な状況であった。

遺跡のある地形的には、北部と東部に谷が入る南北に比較的細長い台地骸部にあたるため、弥生時代に集落として還地するには、ほかに良好な立地条件の場所と比べると優先度が低かったためであろうか。中世以降にも少しばかりは山茶碗などが出土するものの、遺構は希薄であった。13 世紀には、笠覆寺が再々興されているので、広範囲に生活域が広がっていたことが今回の地点に中世の遺構が少なかった要因かもしれない。これらとは対照的に、奈良、平安時代の建物群があったことは、笠覆寺との関係が強調されるものとおもわれる。笠覆寺山門から南方向に最も近い位置の遺跡でもあり、具体的な遺構の性格は不明であるが、門前町に発展する礎となった遺構群の一部であったという位置づけになるであろうか。

奈良時代（8 世紀頃から）の竪穴住居跡は、重複も多く、近世の東海道以前にも海岸部に近い街道のひとつが付近にあったことで、多くの建物が必要とされたのであろう。

図９は、竪穴住居跡の検出土層面においての観察による新旧の切合関係を示した。ただし、各遺構の出土遺物が良好な出土状態でなかったため、遺物の時期と連動しているとは限らない。

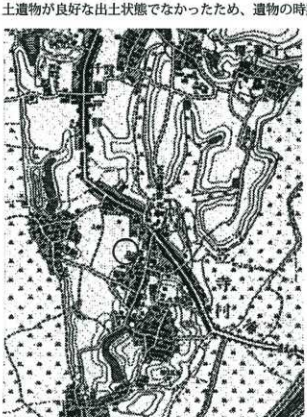


図７　調査地点位置（明治期の地形図より）

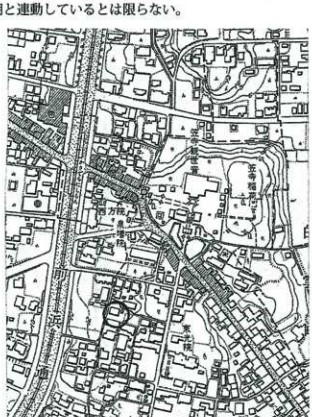


図８　調査地点位置

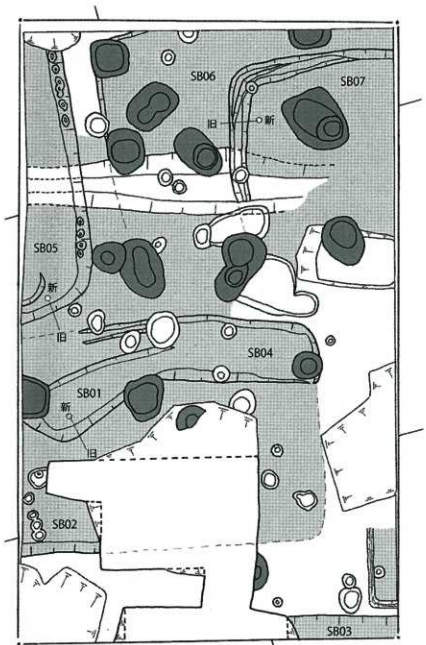


図9　竪穴住居跡の新旧関係と掘立柱建物跡

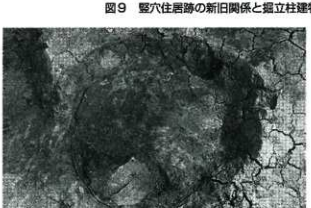


写真50　P18（焼土と土師器甕片の出土状況）

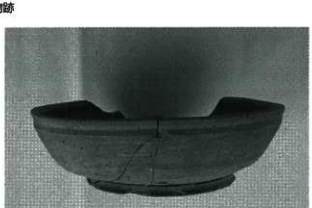


写真51　調査区南壁18層出土遺物（須恵器有台坏）

報 告 書 抄 録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ97
書名	埋蔵文化財調査報告書97
副書名	大門遺跡
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	114
編著者名	水野裕之
編集機関	名古屋市教育委員会　生涯学習部　文化財保護室
所在地	〒460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号　TEL052-972-3269　FAX052-972-4202
発行機関	名古屋市教育委員会　生涯学習部　文化財保護室
所在地	〒460-8508　名古屋市中区三の丸三丁目1番1号　TEL052-972-3269　FAX052-972-4202
発行年月日	西暦2023年（令和5年）3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
だいもんいせき 大門遺跡	なごやしみなみく 名古屋市南区 かさでらちょうおざだいもん 笠寺町字大門 46番、71番2	23100	15-37	35° 09′ 53″	136° 93′ 50″	2022.7.12 ～ 2022.8.4	60㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大門遺跡	集落跡	奈良、平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	須恵器、土師器 灰釉陶器	第1次調査
要約	名古屋城から南に延びる熱田台地上の遺跡で、今回の地点が初めての発掘調査であった。遺構は、奈良時代の竪穴住居跡と平安時代と思われる掘立柱建物跡が重複して検出された。これらは、付近に位置する古代以降の寺院と時期的な関連が認められる。出土遺物は少なかった。				

名古屋市文化財調査報告 114
埋蔵文化財調査報告書 97
大門遺跡
2023（令和5）年3月24日
発行　名古屋市教育委員会
印刷　マツモト印刷株式会社